

## 500hPa高度場における北半球夏のテレコネクション

稲田 智子

テレコネクションとは、地球上で数千km以上も離れた地点間の気象・海象変化に互いに関連が見られることとされている。このテレコネクションについて、過去にさまざまな研究が行われているが、系統的な研究としては北半球の冬を対象としたWallace and Gutzlerが著名である。彼らは、NMCのデータより、1962/63～1977/78年の冬季(12・1・2月)、計45ヶ月の北半球の地上気圧および500hPa高度を使用して同時相関を取り、北半球の冬にみられる5つのテレコネクション(東太平洋、北半球・北米、西大西洋、西太平洋、ユーラシア)を示した。

一方、Wallace and Gutzlerが論じなかった夏のテレコネクションについては、気圧幅が小さいこともあり、気圧分布図によってはっきりした同定がされていなかったが、最近では日本の気候を論ずるうえでも、夏におけるテレコネクションには注目を要する。先行研究によれば、日本の夏には大きく分けて3つのテレコネクションが関わって

いるとされている。1つはPJパターンなどの南からのテレコネクション、2つはアジア大陸上の亜熱帯ジェットに沿って伝播するロスビー波によるテレコネクション、3つは寒帯前線ジェットに沿って西から伝播するロスビー波によるテレコネクションがあるという。これらのテレコネクションパターンが複雑に絡み合って日本の冷夏・初夏に影響を与えていると考えられるが、それがどの程度寄与しているのかはまだ明らかにされていない。各テレコネクションに関係する要因などがわかれば、今後は予測も可能になるだろう。

本研究では、まず月単位における冬のデータを使用して、Wallace and Gutzlerの再現性を確認したうえで、月単位の夏のデータを使用して解析を行った。その後、半月単位における北半球夏の500hPa高度の季節進行の経年変化の相関関係から、相関の強い遠く離れた2地点を探すことから始め、季節変化を除いた夏のテレコネクションについて論じた。

## 日本社会に生きる「在日」コロンビア人：とある「カリブ料理店」を通してみるエスニック・コミュニティと生活世界

上田 まゆ子

「在日」外国人は、特定の場所に集住し、可視的なエスニック・コミュニティを形成する傾向がある。しかし「在日」コロンビア人のような少数派の場合は、各地に分散するため、可視的レベルでのエスニック・コミュニティは成立しにくい。従って彼らは、特定の場所に集住するよりも、特定の場所に集い、「たまり場」を作るという方法で、自分たちの結節点を持つ。そこで本論文では、ある地域一帯の「在日」コロンビア人のエスニック・コミュニティの場となっている、「在日」コロンビア人女性が経営する「カリブ料理店」での2年間の参与観察、ライフストーリー調査から、「在日」コロンビア人の生活世界を描き、彼らにとってのその場所の意味を考察した。

その結果、「カリブ料理店」という場所が、「在日」コロンビア人にとって単なるレストラン、憩いの場というだけでなく、日本で生活していく上で重要な「セーフティーネット」の役目を果たしていることが分かった。「コロンビア的空間」に囲まれることで、コロンビア人であるというアイデンティティを再認識したり、日本で生きていくためのライフラインともなる情報を得たり、ビジネスチャンスを広げたりと、少数派の彼らにとっては重要なソーシャルネットワークの場となっている。特に言葉の問題を持つ人たちにとっては、スペイン語で話すことが当然とされ、母国語で悩みを相談できるその場所は、「東の間のマジョリティー」として店の外の日本社会を忘れられる貴重